わが国近代の住宅における「子供室」の出現とその推移について

渕上貴由樹*·石川宏樹**·後藤隆太郎***·丹羽和彦***

The appearance and the transition of the "children room" in the modern houses in Japan

By

Takayuki Fuchikami, Hiroki Ishikawa, Ryutaro Goto and Kazuhiko Niwa

Abstract: From the latter Meiji Era to the early Showa Era, the trials of new living style spread in the middle class houses in Japan. The appearance of a "children room" will be also listed to the one of that attempts. In this paper, we consider the time of the appearance used name: "children room" and the change of its position at the floor plans contained in housing books published in those days. The main clarified points are as follows: 1) The early "children room" can be checked in the latter Meiji Era, and it become popularize after the latter Taisho Era. 2) At the beginning, "children room" occupied at the first floor. But, when the Showa Era, "children room" connected with the parents bedroom and its position moved to at the upper floor.

Key words: "children room", parents bedroom, middle-class houses, modernization

はじめに

大正期から昭和初期にかけてわが国では、比較的 恵まれた階層である棒給生活者層を中心にしてより 文化的な生活を求めようとする機運が高まった。そ れは独立住宅においても例外ではなく、棒給生活者 層の住宅、すなわち中流住宅を中心にして居住生活 の改善を試みる提案がなされる。提案の内容は技術 的なものにとどまらず、中には思想的な性格をもつ ものにまで及ぶが、中流住宅はそれらの取捨選択の 過程を経て、変容を遂げるに至った。

近代における居住空間の質の変容として、それま で存在しなかった「子供室」(以下、「」を省略す る)の出現が一つに挙げられる。それまでの住宅と いうものは「いえ」や主人を中心とする家長制度が 反映されていた。それがこの時期になると、主婦や 子どもの生活を見直そうとする居住環境の改善が求 められるようになる。子どものための部屋を設ける といった動きもこの頃に顕著になったと想定できよ う。しかしこれまでの研究において子供室の出現時 期の特定やその変遷過程ついて主だった検討はなさ

平成18年11月1日受理

れていない。

ある事柄の浸透や変遷について検討する際、特殊 なもの、先端的なものばかりではなく、より一般的 なものも対象とする必要があろう。そのため先駆的 な住宅や特異な住宅作家等を扱うような個別研究と は自ずと異なる方法を探らなければならない。そこ で本稿では当時出版されたごく一般的な住宅関連の 書籍を取り上げ、そこに掲載された図面等を中心に 数量的検討を行うことで、総体的な傾向の把握を試 みる。これらの作業をとおして近代における子供室 の出現とその推移について考察し、わが国独立住宅 の近代化過程における性格のひとつを明らかにする ことを目的とする。

1. 研究対象について

本稿では既往研究1)を踏まえ、住宅においても 近代化が大きく進み、その過程で様々な提案が試み られた明治後期から昭和初期までを時間的な範囲と する。用いる資料については、当時刊行された住宅 関連の書籍を用いる2)。これらは近代化の過程で発 生した会社員や官公吏員などの比較的恵まれた近代 的棒給生活者を中心とした住宅を主に取り扱ってい るものが多く、当時の中流住宅に対する計画的な思 想を読み取ることが期待できるためである。中には 当時実施された住宅設計競技の図案集など、提案に

^{*}工学系研究科システム生産科学専攻博士後期課程

^{**} スウェーデンハウス株式会社

^{***} 理工学部都市工学科

[©]佐賀大学理工学部

表 - 1	1	主宅関連書における子供室の有無と比率

No.	発行年	著者	書名	出版社	図	記述	有	全	比
1	明治35年11月	井上繁次郎	通俗家屋改良建築法	博文館	×	•			_
2	明治37年9月	齋藤兵次郎	日本家屋構造	信友堂書店	×	×			2
-	明治39年9月	駒杵動治	和洋住宅建築學 上巻	須原屋書店	×	•			_
4	明治40年1月	鵜飼長三郎	和洋住宅間取實例圖集 全	工業書院	•	×	3	22	14%
5	明治40年4月	駒杵動治	和洋住宅建築學 下巻	須原屋書店	×	×			_
6	明治41年	建築学攻宪会編	日本家屋間取雛形集 1年2		•	×	1	28	4%
7	明治43年8月	建築書院編集局編纂	和洋住宅建築圖集 全	建築書院	•	×	1	12	8%
8	明治44年	建築世界社編	建築圖案集		×	×			2
9	大正2年12月	金子清吉	日本住宅建築圖案百種	工業書院	•	×	11	84	13%
10	大正3月	遠藤於苑	和洋建築設計図会	大倉書店	•	×	3	113	3%
11	大正5年10月	佐藤功一	報知懸賞住家設計図案集	大倉書店	•	×	11	72	15%
12	大正8年	西村伊作	楽しき住家	住宅改良曾	×	•			_
13	大正8年2月	近間佐吉	最新圖説模範日本住宅	鈴木書店	•	•	4	17	24%
14	大正8年6月	建築書院編集局編纂	かし家と小住宅 建築圖案五十種	建築書院	•	×	3	40	8%
15	大正8年10月	佐方志津/後閑菊野		成美堂·日黒書店	×	×			-
16	大正8年10月	佐方志津/後閑菊野	近世家事教科書下卷	成美堂·日黒書店	×	•			-
17	大正8年10月	住宅改良曾	最新住宅圖説	住宅改良曾	×	×			-
18	大正9年1月	長谷川真治	和洋折衷の住宅	鈴木書店	•	•	2	10	20%
19	大正9年2月	納谷松蔵	参手圓以下で出来る趣味の住宅	鈴木書店	•	•	1	21	5%
20	大正9年11月	吉川清作案	現代の住宅	洪洋社	•	×	7	15	47%
21	大正9年12月	遠藤於苑	日本住宅百圓	大倉書店	×	•			-
22	大正10年3月	近間佐吉	各種貸家建築圖案 及利廻の計算	鈴木書店	•	•	3	19	16%
23	大正10年8月	住宅改良曾	新しき住家	住宅改良曾	•	×	2	15	13%
24	大正13年	建築書院編	新しき日本住宅の間取と外形図集	建築書院	•	×	5	18	28%
25	大正13年4月	芹沢英二	新日本の住家		•	•	7	27	26%
26	大正13年7月	保岡勝也	最新住宅建築	鈴木書店	•	•	9	16	56%
27	大正13年8月	保岡勝也	日本化したる洋風小住宅	鈴木書店	•	×	2	30	7%
28	大正13年10月	大屋霊城	庭本位の小住宅	袋華房	•	•	16	28	57%
29	大正14年1月	保岡勝也	欧米化したる日本小住宅	鈴木書店	•	×	27	30	90%
30	大正14年6月	三越呉服店圖書部版	惩賞募集臺所設計圖案集	三越呉服店	×	×			-
31	大正15年	芹沢英二	現代住宅間取百選	アルス	•	×	11	42	26%
32	大正15年8月	武田五一	住宅建築要義	文献書院	×	×			-
33	大正15年12月	遠藤於苑	西洋住宅百圓	大倉書店	×	×			_
34	昭和2年8月	保岡勝也	和風を主とする折衷小住宅	鈴木書店	•	×	23	33	70%
35	昭和2年8月	保岡勝也	洋風を主とする折衷小住宅	鈴木書店	•	×	29	35	83%
36	昭和3年6月	山田醇	家を建てる人の為に	資文堂書店	•	•	5	20	25%
37	昭和3年12月	藤井厚二	日本の住宅	岩波書店	×	×			-
38	昭和4年3月	主婦之友社編集局編	中流和洋住宅集	主婦之友社	•	×	2	10	20%
39	昭和4年6月	遠藤於苑	日本向きのバンガロオとコッテエヂ	大倉書店	×	×			-
40	昭和4年6月	朝日新聞社版	朝日住宅圖案集	朝日新聞社	•	×	74	78	95%
41	昭和5年3月	大阪毎日新聞社選定	健康住宅設計圖案集	大倉書店	•	×	18	22	82%
42		宮田荘七郎	吾等の住居	洪洋社	•	•	6	40	15%
-		遠藤於苑	和洋住宅設備圖集	大倉書店	×	×			-
		朝日新聞社刊	五室以内の新住宅設計	朝日新聞社	•	×	23	46	50%
		山田醇	住宅建築の實際	新光社	•	•	9	45	20%
	昭和8年	亀井幸次郎	誰にも出来る住宅の設計	清水商会出版部	•	•	5	7	71%
-		山田醇	中流住宅設計図並像算敷量書	滅文堂新光社	•	×	1	2	50%
48		中村興資平	住居		•	•	1	4	25%
49	141111-1-1-1-1-1	山田醇	保健住宅	滅文堂新光社	•	•	1	9	11%
50	昭和14年12月	平尾善保	住宅讀本	日本電建株式會社出版部	×				-

●:子供室に関する記述又は図がみられるもの ×:子供室に関する記述又は図がみられないもの 有:「子供室」を有する図面数 全:対象(20~70坪)に当てはまる全図面数 比:「子供室」を有する図面数の比率

とどまった住宅図も多く含まれるが、それらも当時の住宅に対する計画的な側面を十分に反映しているものとして対象に加えている。ただし、掲載されている住宅図案の中には100坪以上の大規模なものまで含まれている場合があるため、中流住宅の住宅規模を網羅しうる範囲として延床面積が20坪から70坪に収まる住宅を選択し、その平面図を分析対象とした。

子供室を抽出する条件はその室名の記載によった。ただし記載される室名については、子供室、小児室、児童室、勉強室、遊室などの他に男女の区別のあるものなど、数多くの表記の仕方が確認された³)。本稿の作業は子供室の出現とその位置の推移に着目することから、表記の違いはあるものの、子どものための部屋として判断し、まとめて抽出した。以下、これらを子供室として扱う。また一方でこれらの文献については子供室に関する記述説明を伴うことも多く、その有無についても確認を行った。

2. 住宅平面図における子供室の出現傾向

以上の住宅関連書を発行された年代順に並べ、住

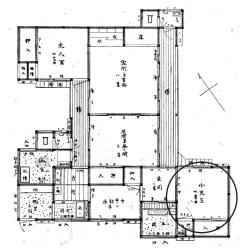


図-1 子供室を有する住宅平面図の一例 (『報知懸賞住家設計図案』より)

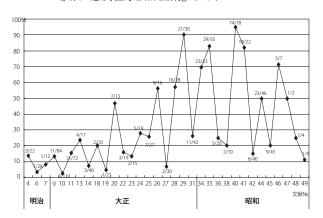


図 - 2 子供室を有する住宅平面図の比率

宅平面図上における子供室の有無、そして子供室に関連する記述の有無について調べた結果を表 -1 に示す。対象とした住宅平面図 1010 件のうち、子供室の記載が確認できたのはその 32.3%にあたる 326 件であった。この表からは明治末期には既に子供室の室名記載がある住宅平面図を確認できる。分析対象範囲内に限れば、明治 40 年 1 月に出版された鵜飼長三郎著『和洋住宅間取實例圖集 全』(文献 No.4) は最も早い時期に子供室を有する住宅平面図を確認できる。

次に子供室をもつ住宅平面図が確認できた文献について、子供室を有する住宅平面図の比率の推移を各文献ごとにみていった(図-2)。対象時期全体を通してみると、明治後期から大正前期頃の文献は比率の大きさが20%台を上限として低い値を推移している。しかし大正後期以降になると、50%以上の高い比率を示す文献が多く確認できるようになる。しかし一方で20%台以下の低い比率を示す文献も依然含まれていることがわかる。このような数値の隔たりは各文献に掲載されている住宅図案の数量、または文献がもつ性格や趣向の差異から生じることが推測できる。例えば、主婦之友社編集局編、

『中流和洋住宅集』(文献 No. 38)をみると、主婦之友社といった子どもの生活環境を重視すると判断できる編者の文献においても10件中2件という少数な値を示す場合も確認できる。その一方では、朝日新聞社版、『朝日住宅圖集』(文献 No. 40)のように、78例中74例の案に子供室が描かれているといった、高い比率をもつ文献も存在する。この図集にある記述に注目すると、中小住宅建築設計競技詳細規定の中に、「想定建築敷地、所在東京近郊にして敷地は一面道路に沿い面積五十坪以内とす4)」とあり、延床面積も20坪から40坪程度に集中している。これは当時としては小規模な住宅を扱っており、床面積の縮小化という状況下でも子供室を設けようとする動きが高いことが確認できる。

以上のことをまとめると、明治後期頃には既に子供室の記載が一部の住宅平面図において確認できた。ただしそれ以前に出版された住宅関連書は数が限られていると想定され、かつ当該資料の数の確認が難しかったため、出現時期を特定するまでには至らなかった。子供室を設ける住宅図案を多く掲載する文献が現れ始めたのは大正後期以降で、文献によってその差にばらつきがあるが、この頃を境にして子供室が住宅設計の中に定着していく動きが低いて子供室が住宅設計の中に定着していく動きが低いた必要があたと捉えることができる。ただし依然低い比率を示した文献も存在していることから、さらにそれらの性格を把握し、記述内容についても詳細に検討する必要があろう。

3. 住宅平面図における子供室の推移

3.1. 位置する階

この章では、住宅の二階建て化といった階数の変容を視野に入れて、住宅の位置の推移について検討を行う。そもそも近代化以前のわが国の住宅にとって二階という概念は、商家などの一部特殊なものを除き存在しなかったといってもよい⁵⁾。近代期における二階の登場という大きな平面構成の変容は、子供室の配置にもなにがしかの影響を与えている可能性が考えられる。

ここでは二階建て住宅の住宅平面図に限り、一階、二階どちらに子供室が位置しているのかをみていく。まず、全体的な比率をみてみると、子供室が一階に位置している住宅平面図は、二階建て住宅にみられる子供室の総数 216 例中 80 例の 37.0%、逆に二階の方に位置しているものは 136 例の 63.0%という結果になった。対象とする時期全体においては二階に位置する傾向が強い。

次に、子供室が一階、二階どちらに位置するか比率として換算したものを、文献の出版年順に示し、その推移をみた(図 - 4)。これによると大正後期頃までについては、一階に位置する住宅平面図の方が多いことが分かる。ただし、なかには一階、二階

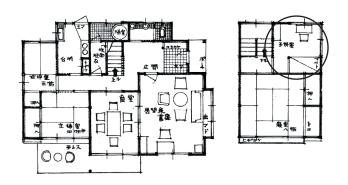


図-3 二階に位置する子供室(『五室以内の新住宅設計』より)

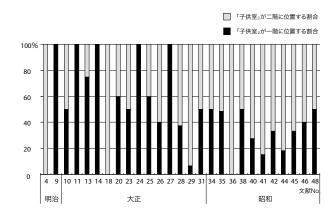


図 - 4 子供室が位置する階別からみた住宅平面図の比率 (二階建て住宅に限定)

のいずれかに傾向が偏っている文献も散見できる。 昭和期に入ると、そうした傾向を示す文献は見られ なくなり、二階に位置する住宅平面図の方が多く占 めるようになる。

以上の結果を踏まえると、当該時期全体としてみた場合、子供室が二階に位置する住宅が多いことが分かった。しかし経年的な変化としてみた場合、大正後期頃までは一階に子供室を設ける傾向にあったとみることができる。ただし、一階、二階どちらかに傾向が偏っている文献が複数確認でき、それらが対象期間の前半部分にみられる。これは選択した文献の性格に起因することもあろうが、子供室を一階、二階いずれの階に設けるべきか判断しかねている時期であったと捉えることもできよう。それが昭和期に入ると、徐々に二階の方に位置していく傾向を強めていったと考えられる。

3.2.子供室と寝室との位置関係

上記の結果より、大正後期から昭和初期にかけて 平面図上における子供室の二階への移動を大まかに 確認することができた。ここではさらに寝室⁶⁾と の位置関係という視点から、子供室周辺の状況の変

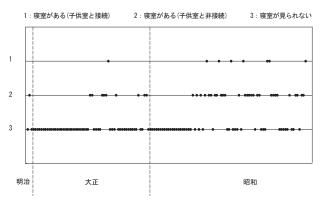


図-5 平屋建て住宅における子供室と主寝室の位置関係

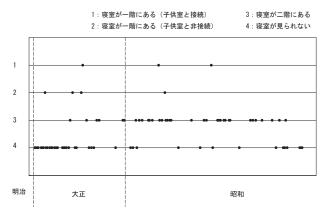


図-6 二階建て住宅における子供室と主寝室の位置関係 (子供室が一階に位置する場合)

化をみていくこととする。平面図上の寝室の特定については、子供室のときと同様に寝室に関連する室名の記載が確認できることを条件とした。なお、これまでの検討によって子供室の位置する階に変化がみられることから、平屋建て住宅と二階建て住宅の場合に分け、さらに二階建て住宅の場合、子供室と寝室双方の位置する階の同異を判断して、互いの位置関係をみていくこととする。

3.2.1. 平屋建て住宅の場合

平屋建て住宅において、子供室と寝室との位置関係の関連性を表す指標として、まず寝室の記載の有無、そして子供室と寝室との接続関係について検討し、それに該当するものを振り分け年代順に並べていった(図-5)。なお、ここで述べる接続とは室から室へと直接の行き来が可能な状態を示し、室と室が非接続⁷⁾の状態とは区別して扱うこととする。

この図によると明治後期から大正期半ばにかけて 寝室を確認できないものが集中していることが分か る。なぜ寝室の記載が確認できないかというのは、 それらの室が畳敷きで構成され、何帖といった表記 でなされていることが多く、室機能の特定が困難で



2:寝室が二階にある(子供室と非接続) 4:寝室がみられない

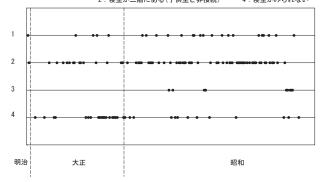


図-7 二階建て住宅における子供室と主寝室の位置関係 (子供室が二階に位置する場合)

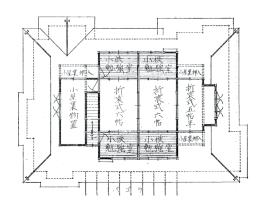


図 - 8 小屋裏を二階として利用し子供室にあてている住宅 (『住宅建築の實際』より)

あるものを寝室がみられないものとして分類したことが要因として挙げられる。さらに、中には寝室のスペースをも持たない場合がみられた。これらは居間を寝室と兼用していたものと考えられる。

それが大正後期頃を境に寝室の表記・位置を確認できる平面図が増加していく傾向にある。寝室が確認できるものに限ってみると、子供室とは接続しない平面が大正後期から昭和初期を通して認められる。一方で寝室と子供室が接続している平面は昭和期に入った後に数例確認することができる。

3.2.2.二階建て住宅で子供室が一階に位置する場合

二階建て住宅で子供室が一階に位置する場合における寝室との位置関係について検討する。まず寝室の記載の有無、そして寝室が確認できたものについては、寝室がどの階に位置するのか、さらに子供室との接続関係についても確認した(図 - 6)。この図によると平屋建ての場合と同様に、対象時期の初期にあたる住宅平面図は、寝室の記載が確認できないものが多く、それが大正後期以降、寝室を確認することができるようになる。次に、寝室が確認でき

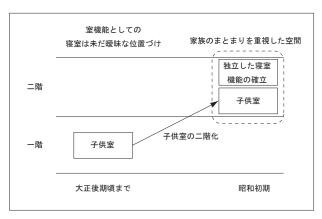


図 - 9 子供室と寝室の位置関係の動きからみた 平面構成の変化

るものに着目すると、それらの多くが二階に位置していることが分かる。その一方で子供室が一階に位置し、寝室も一階に位置している事例はほとんど見られない。このことから、二階建て住宅で子供室が一階に配置された場合、寝室は二階に位置していることが多く、子供室と寝室との関係性はあまりないものとして扱われている事例が多いといえる。

3.2.3. 二階建て住宅で子供室が二階に位置する場合

最後に二階建て住宅で子供室が二階に位置する場 合における寝室との位置関係について検討する。前 述した検討と同様に、まず寝室の記載の有無、そ して寝室が確認できたものについては、位置する 階、子供室との接続関係について確認を行った(図 - 7)。まず寝室の記載が確認できない住宅平面図 は大正後期までに集中している。寝室が一階にある ものは事例がほとんどみられない。これらの図案を 詳細にみてみると、小屋裏を二階として利用し、そ この空間全てを子供室に充てており、結果的に一階 部分に寝室が位置しているというものである(図-8)。一方、子供室と寝室が共に二階に位置してい る事例は大正期中頃から数多く確認することが出来 る。双方の接続関係についてみてみると、接続して いない事例の方が多く、かつ大正期中頃からそれが 一定の頻度で確認できる。そして、子供室と寝室が 接続している事例は前者と比べると数は少ないもの の、昭和期に入るとこちらも一定の頻度でその事例 をみることができる。

以上のことをまとめると、まず大正期中頃まで寝室という記載のある住宅平面図は少なく、当時の平面から主人が寝る場所を特定することは困難な場合が多い。また、居間を寝室として兼用させていると考えられる事例もあり、畳敷きを主とする当時の住宅では一つの部屋で複数の機能をあてており、平面図上に記載するのは難しかったのであろう。した

がって室名の記載を追う限りでは、子供室の方が寝室よりも早く平面図上に登場し、子供の部屋として独立した室機能を確保する傾向にあったことを読み取ることができる。それが大正の終わり頃から昭和期に入る頃になると寝室についても平面図上に記載されるようになる。図 - 6、図 - 7の結果から、この頃になると子供室がどちらの階に位置したとしても、寝室は二階の位置に固定される傾向が強かったことが確認できる。

既に述べたように子供室は大正後期頃までは一階 に位置する傾向にあったが、昭和初期に入ると徐々 に二階へ移動する傾向にあった。これは寝室という 室機能の確立が子供室の二階部分への移動を促した ともみることができ、それは二階部分の平面構成が 家族個々の空間を主として計画されるといった質 の変容を表す過程の一部として捉えることができよ う。さらに子供室と寝室の接続関係については、全 体的に接続しない事例の方が多いが、昭和期に入る と接続している事例も幾つか確認できた。これはひ とりひとりの場所をつくり出していく傾向をもちな がらも、一方では個人の独立性を高めるといった配 慮にまでは至っていない事例も多いことを示し、個 人への配慮というよりも家族としてのまとまりを重 視した空間をつくりだすといった意味合いの方が当 時としては強かったことを指し示していると推測で きる。

以上のように、寝室は当初一階か二階のどちらに 位置しているかという以前に、その室機能の判別も 曖昧であった。子供室は寝室よりも早い時期に独立 した室機能として確立していったが、初期の段階で は一階か二階どちらの階に位置するかは定着してい なかったと考えられる(二階建ての場合)。それが やがて昭和期に入ると、主人が寝るための部屋とし ての機能が住宅のなかで確立されてゆき、それが二 階部分に現れるようになる。その時期を同じくして、 子供室の位置もようやく二階の方へと移動する傾向 を強めていくようになる。

まとめ

本稿では、子供室の出現時期と、その位置の推移について経年的な分析から検討を行った。出現時期については、早いものは既に明治後期頃から子供室を確認できた。ただしそれ以前の時期については資料の確認が難しく、今回の分析で出現時期を明確に特定するまでには至らなかった。大正後期以降になると子供室を有する住宅が増え始め、中流住宅において子供室をもつことが一般化し始めた考えられる。

次に住宅における子供室の位置の推移については、大正後期頃までは一階に位置するものが多かったが、昭和期に入ると、二階部分へと移動する傾向

が確認された。これは以前までは曖昧な扱われ方を していた寝室が徐々に独立した室として確立し、寝 室が二階部分に固定されたことが大きく関係してい ると考えられる。これは二階部分を子供室と寝室を まとめて、家族的な空間として包括的に扱うことを 意図したことが反映していると見ることができ、子 供室の二階への移動はその一連の動きを表すものと 捉えることができよう。

註

- 1)代表的なものに、木村徳国「日本近代独立住宅様式 の成立と展開に関する史的研究」、北大工学部研究報 告 No. 18-21、昭和 33-34 年.九州大学青木研究室「中 流住宅の平面構成に関する研究(1)-(3)」、住宅建築 研究所報 No. 9-11、昭和 58-60 年.内田青蔵『日本 の近代住宅』、鹿島出版会、平成 4 年.等がある。
- 2) 本稿で用いる文献は近代住宅史のこれまでの研究において用いられるものをほぼ網羅しており、また子供室の検討に必要かつ十分なものを対象としている。これらの文献を扱った同様の研究については、立川智浩・丹羽和彦「わが国近代の住宅における「二階」の展開」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2003年、が挙げられる。
- 3) 対象文献の住宅平面図に記載されていた「子供室」 の室名の表記は以下のものが挙げられる。(子供室、 子供間、子供部屋、子供書斎、子供之間、學齢子女室、 小児室、児童室、學齢児童室、勉強室、児女室、子 供遊室、子供寝室)
- 4) 朝日新聞社版、『朝日住宅圖案集』、朝日新聞社、昭和4年6月、巻頭「中小住宅建築設計競技詳細規定」.
- 5) それまでの二階には「望楼」「楼閣」などの特殊なものに限定されていたといえる。江戸期に入ると大都市の商家などに一部現れるが、専用住宅においては明治の後期を待たなければならない。
- 6) 本稿で述べる寝室とは複数の機能を持たない寝るためだけに用意された部屋としての意味で用いる。また、平面図の表記からの抽出では誰のための寝室かまでは特定することは困難なため、ここでは家族の誰が寝るかといった限定までは行っていない。
- 7) ここでいう非接続とは、室と室の直接の行き来を可能にしていない状態を示す。よってここでは室同士が隣接している場合や、室と室がある程度離れている場合も非接続として同様に扱った。

図版出典

- 図-1佐藤功一、『報知懸賞住家設計図案』、大倉書店、 大正5年10月、p28、第十八圖.
- 図-3朝日新聞社刊、『五室以内の新住宅設計』、朝日新聞社、昭和7年4月、p. 156.
- 図-8山田醇、『住宅建築の實際』、新光社、昭和7年5月、 p. 355